ISSN: 3048-8141 (Online)

DOI: 10.5281/zenodo.18367522

Taiyō
An International, Peer-Reviewed, Refereed, Open Access e-Journal
www.taiyoejournal.com

『ジュータン』と『破壊』の比較研究：インドと日本におけるカースト問題を中心に

Chandani Kumari
chandanikumarijnu@gmail.com

Abstract: Dalits in India and Burakumin in Japan shares core similarities in experiencing discrimination and oppression, which is based on perceived notion of impurity that forced them to have lower status in their own country. After the Meiji restoration in Japan, the discrimination against the Burakumin was abolished by law in 1871 and in India, the first law against the untouchability was made in 1955, Eight years after the independence, which were revised time to time in both countires. In this paper, I am comparing the status of these two communities on the basis of their portrayal in *Joothan*, an autobiography written by a Dalit writer Om Prakash Valmiki and *Hakai*, written in biographical tone by Shimazaki Toson, a pioneer of Naturalism in Japan.

(Key words: Discrimination, Caste issues, Burakumin, Eta, Dalit)

要約：
インドのダリットと日本の部落民は、自国で低い地位を与える不浄の認識に基づく差別と抑圧を経験しているという点で根本的な共通点を持っている。日本では明治維新後、1871 年に部落民に対する差別が法律によって廃止され、インドは独立して 8 年後になってから 1955 年に初めて不可触民を禁止する法律が制定された。本稿では、ダリット作家オム・プラカシュ・ヴァルミキの自伝『ジョータン』と、日本における自然主義の先駆者である島崎藤村の伝記調の『破戒』における描写に基づき、穢れの概念を背景にしながら両コミュニティの位置と取り扱いを比較する。

（キーワード：差別、カースト問題、部落民、穢多、ダリット）

ISSN: 3048-8141 (Online)
DOI: 10.5281/zenodo.18367522
Taiyō
An International, Peer-Reviewed, Refereed, Open Access e-Journal
www.taiyoejournal.com

紹介

大昔から世界中に種々の差別や抑圧が示されている。歴史をさかのぼって見ると人種差別、性差別、カーストや仕事による様々な差別や抑圧が国々にあったということが分かる。

昔はインドでも職業による差別が存在していた。例えば下品と思われる仕事つまり掃除人や殺戮者の仕事をする人々が見下され、抑圧されていた。しかし、時間が立つに連れて、この仕事は従事する人々のカーストになってしまった。それでカーストによる差別になってしまった。社会をきれいにする仕事であっても社会から見下されているこの人々は本当に惨めな生活を送っていた。例えば、この集団の人達の住宅地は村や都市と離れ、外側にあった。現在でもそれほどでもないけれども政府に禁じられても一般的の人々の中で差別は存在しているに違いない。

その一方、現在ダリットと言われるカーストの文学投稿は昔から大事である。ヒンディー語の文学を始めるシッダーナートの伝統のすべての詩人はこのカーストの人だった。その次のバクティ時代のほとんどの作者もダリットだった。ダリットという言葉は最初 19 世紀にジョティバ・フレによって発言された。ダリットは社会的、伝統的、政治的な権利のため争っている下のカーストの努力を示している。

The term “Dalit” came into existence due to the efforts of Mahatma Jyotibha Phooley who is considered to be the very first Dalit reformer (Gulati, 2018). The term “Dalit” in the 1930s was synonymously used as a Hindi/Marathi version of the depressed classes (Omvedt, 2012).

なお、インドと同じく日本でも 14 世紀のころから『士農工商』という身分制度があった。封建社会の身分観念に従って、上位から順に並べたものである。さらに、その中に入らない人は「穢多」と呼ばれて見下されていたということが分かった。その人たちの仕事も直接に死人、革や血につながっていた。さらに、日本の重要な宗教神道にけがれの概念が昔から存在していたので一般の人々の間にそれにつながっている仕事をする人は不潔な人間だという考えがあった。日本にもインドと同じくその人々の仕事や住宅地が決められていたし限られていた。これは 14 世紀の末ごろの事だ。また、徳川時代になってからこの身分制度はもっと厳しく実行されるようになった。神道は死、血、汚れに対する清浄と穢れの概念を強調し、仏教の殺生のタブーによってさらに支持された。

ISSN: 3048-8141 (Online)
DOI: 10.5281/zenodo.18367522
Taiyō
An International, Peer-Reviewed, Refereed, Open Access e-Journal
www.taiyoejournal.com

インドと日本、両国ではダリットや穢多の中にも様々な階級がある。それらの階級にも仕事によって段階がある。その上、インドでその人たちは自分の名前で呼ばれない代わりに下品な仕事名で呼ばれていた。例えば「チャマール」、「ドーム」などは仕事の名前だが今でも公などでその仕事をする人は自分の名前で呼ばれず、仕事名で呼ばれている。その人々にとってこれは毎日の事である。「チャマール」と呼ばれるものは革につながっている仕事をしているが「ドーム」と呼ばれる者は掃除や墓場で仕事をしている。

その一方日本では「きよめ」、「非人」「河原者」、下品な仕事をしている人のカースト名であった。「非人」は仏教の表現であるがこの人たちはハンセン病にかかっている者の名だ。または、目の不自由な人たちだった。「非人」の言葉通りの意味は人間ではないという事である。かわらものは川に沿って住んでいる、動物につながっている仕事をする人々だった。 その上、芸人たちもある意味まで河原者と言われていた。

両国ではこの社会問題は昔の制度によって生み出されたが現在もまだ存在している。さらに、日本の場合はそれについて研究もあまりなく、書物もあまり見当たらない。インドのダリット文学は少なくとも 40 年前から現れているが日本の場合は 1906 年に「島崎藤村」によって書かれた「『破戒』」と 1963 年に「土方鉄」によって書かれた「ちかけい」（地下茎）も落問題をもとにしている作品として現れるがその長い間にはあまり見当たらない。さらに、土方鉄氏は自分も部落民の一人で『破戒』の主人公「丑松」の性格は部落の性格のようではないと声を出した。それに、部落の文学は部落民が書くことが必要だとも考えている。だからこそ自分も「ちかけい」を書いた。最近のダリット文学の場合も似ている議論があった。ダリットについて書かれている文学か、ダリットによって書かれている文学か、どの文学がダリット文学と呼ばれるのか。有名な批判者ナマワル・シングがダリット文学について一言を言ったがそれはとても話題になった。シング氏が述べたのを日本語にすると『馬について書くのに馬になる必要がない』という意味する。この陳述を分析すると上位カーストの人の自慢が良く見られると言うダリット集団の批判の声が出て来た。因みに、ダリットによって書かれた文学はダリット文学として容認さ

ISSN: 3048-8141 (Online)
DOI: 10.5281/zenodo.18367522
Taiyō
An International, Peer-Reviewed, Refereed, Open Access e-Journal
www.taiyoejournal.com

れている。さらに私の研究の元にある本「『ジュータン』」はそのような例でいっぱいである。ヒンディー語の『ジュータン』は自伝風の小説であるがその一方日本語の『破戒』の作家は「穢多」ではなくその問題を社会問題として見ている。

研究の目的：

１。被差別部落当事者の自己表現とインドのダリッっトの自己表現を明らかにする。

２。法律的に禁止された後他の一般市民の意識と支援の影響を明らかにする。

３。本当の自分を隠すことの苦痛など、人間の核心的な感情を比較する。

４。社会問題への取り組みにおけるインドと日本の見通しの違いを研修する。

研究の方法：

研究方法はナラトロジーで最初はダリット文学と部落民について書かれた文学のデータを集めた。同時に、ダリットと部落民解放運動の歴史も参考にして学習した。比較する点で　　社会位置に関する分析を行った。

『ジュータン』の紹介：

オーム・プラカシュ・ワルミキによって書かれた自伝『ジュータン』はダリット自伝の中で特別な地位がある。この自伝は最初1997年いわゆるインドの独立した50年後刊行された。『ジュータン』を読んでみると 1947 年にインドは本当に独立されたかどうかと言う疑問がある。それは自国の大きな部分はまだ遅れているからである。

子供の時から始まって十代を超えて青年になるまでの人生の旅行が描写されている。子供の時から成人まで様々なことで差別されていた。仕事は下品で人生は貧しかった。村の人々や学校の教師も皆のためダリットは使い捨てのものしかなにもなかった。このような環境で作家は生まれ、育った。最初の恋人もカーストが分かって涙を流したが一緒にいる勇気を見せなかった。しばらくして、結婚したが家内は『私は下のカーストの人だという事を発表したくない』といって作家の名字を自分の名前に付けなかった。

ISSN: 3048-8141 (Online)
DOI: 10.5281/zenodo.18367522
Taiyō
An International, Peer-Reviewed, Refereed, Open Access e-Journal
www.taiyoejournal.com

『破戒』の紹介：

島崎藤村によって書かれた『破戒』は日本での「穢多」の社会問題を取り扱っている。主人公の丑松は学校で先生の仕事をしているが彼は「穢多」だということをだれも知らない。子供の時父親にこの事を秘密にするように言われていた。今までそのまま秘密していたが「れんたろう」という穢多のリーダーに影響を受けて自分も身元を発表したくなるのだがそのまえに同僚たちが丑松のふるまいを見て推測してしまう。話は色々な社会的な信念体系に熟考させる。この諸説は、自分の正体を明かすことを恐れる人物の内面の葛藤を描いています。

『ジュータン』に描かれているダリット

『ジュータン』は自伝風の小説だ。作家のオム・プラカシュ・ワルミキ氏によるとダリットの生活は我慢出来ないほど痛ましく、言葉で表せないほど惨めだ。ダリットに対する上位のカーストの態度は抑圧や差別という言葉の説明に合わないくらい下品だった。動物が触ったら大丈夫だったがダリットが触ったら罪悪のようだった。作家はそのような環境に生まれ、育った。ワルナ制度を反対する作家によると、今も人々はワルナ制度を理想的な制度といっているのだが自分自身がその制度の中で下位のカーストの人として生活するとこの考え方が一日で変わってしまうに違いない、とのことだ。深く見るとこのワルナ制度は誰のための制度だったか。それはもちろん上位のカーストだった。

ワルミキ氏が最初に住宅地について解説している。汚い犬、豚、裸の子供が一緒に回っている池の岸にうちがあった。家族全員が働いているのに収入と支出が合わなかった。さらに、無給労働もあってどうしようもなかった。低いカーストの者は上のカーストの人々のためのツールでしかなかった。使用が終わった後、誰も要らなくて、使い捨てのものだった。下品な仕事のため上のカーストの人々にいつでも呼ばれ、それにいじめられていても否定する勇気は誰にもなかった。ほとんどの人々は教育を受けていなかったので殺戮や肉体労働などしかなにもできなかった。

ISSN: 3048-8141 (Online)
DOI: 10.5281/zenodo.18367522
Taiyō
An International, Peer-Reviewed, Refereed, Open Access e-Journal
www.taiyoejournal.com

子供の時の話である。父親は子供のワルミキ氏を中学校に入学させるように先生に要請した。何日も学校を通い要請し続けた結果、ワルミキ氏は入学できた。他の生徒と離れ、マットレスもない地面に座って勉強を続けた。時々黒板の文字も見えなくなっていた。 下記を見るとそれがもっと明らかになる。

“त्यागियों के बच्चे ‘चूहड़े का’ कह कर चिढ़ाते थे । कभी कभी बिना कारण पिटाई भी कर देते थे। एक अजीब सी यातनापूर्ण ज़िंदगी थी, जिसने मुझे अंतर्मुखी और चिड़चिड़ा, तुमकमिज़ाज़ी बना दिया था। स्कूल में प्यास लगे तो हैंडपंप के पास कहदे रहकर किसी का इंतज़ार करना पड़ता था। हैंडपंप छूने पर बवेला हो जाता था।लड़के तो पीटते ही थे। मास्टर भी हैंडपंप छूने पर सज़ा देते थे। ” (वाल्मीकि,१९६६, पृष्ठ १३)

私の翻訳

“ティアギ達の子供は‘チュハレの’と言っていじめていた。時々理由がないのに殴っていた。惨めな人生で私は内向的で短気になっていた。学校でのどが渇いた時手動ポンプのそばに立って他の生徒達を待つしか仕方がなかった。手動ポンプを触っただけで紛争が起こっていた。学生は殴り、そればかりでなく先生も罰を与えていた。

上記から三つのことが分かる。下のカーストを対象としていじめるのは上のカーストの年上の者だけでなく同じ年齢の子供もそうだった。一世代は二世代に差別や抑圧する権利も遺伝していた。また、学校は社会に教育を受けさせる施設で社会的に平等な所だが率直に差別の例を挙げてみた。理想的な社会を作る責任を持っている先生も平気で残酷な行動をしていた。先生は読み書きだけが出来るものだった。皆同じ人間だという風に自分も行動していなかったし生徒にも教えていなかった。だから、水までも手を伸ばしてはだめだった。学生と共に先生も肉体的な罰を与えていた。これは学校を辞めさせるための手段の一つだった。彼らによると、学校で教育を受けるのは低いカーストの作家の権利ではなかった。彼らは作家が家族の伝統的な仕事をするべきだという風に考えていた。

ISSN: 3048-8141 (Online)
DOI: 10.5281/zenodo.18367522
Taiyō
An International, Peer-Reviewed, Refereed, Open Access e-Journal
www.taiyoejournal.com

差別と抑圧は日常生活の根底にもあった。例えば学校で制服の制度はなかったが古いのを着て来たら差別され、きれいな服を着て来たら皮肉的にいじめられていた。ある日校長は名前とカーストを聞いて学校の掃除をさせた。学校でも勉強の代わりにカーストによる仕事を黙ってやっていた。明日から勉強するという風に考えて作家はその仕事をやっていた。当時、インドが独立して 8 年経っていた。

“पिताजी ने मेरे हाथ से झाड़ू छीनकर दूर फेंक दी । उनकी आँखों में आग की गर्मी उतर आयी थी। हमेशा दूसरों के सामने तीर-कमान बने रहने वाले पिताजी की मूँछे गुस्से में फड़फड़ाने लगी थी। चीखने लगे, “ कौन-सा मास्टर है वो द्रोणाचार्य की औलाद जो हमारे लड़के से झाड़ू लगवावे है!” (वाल्मीकि,१९६६, पृष्ठ १६)

私の翻訳

“親父は私の手からほうきを奪って捨てた。目は火のように赤かった。自尊心の強い親父ははらをたて、私の子に掃除をさせるドロナチャリャの息子の先生は誰だという風に怒っていた。。。”

この文章はインドの歴史的な差別を象徴している。‘ドロナチャリャ’はマハバルタ時代にアーチェリーの先生だった。ある日、ダリットカーストのエクラビャがアーチェリーを学習したいという事を願った時ドロナチャリャは否定した。しかし、自分でドロナチャリャの像の前で毎日練習して上手になった。ある事件の後ドロナチャリャがエクラビャの実力が分かるようになった。ドロナチャリャはエクラビャに先生の名前を聞いてびっくりした。それで、インドの慣習によりグルダキシナとして右手の親指を要求した。エクラビャは先生に親指を切ってあげた。

作家の父親が歴史のその事を例として挙げて怒っていた。今、十数年後も学校と言う組織は学生の中でカーストによって差別を続けている。名前と時代が変わっても人々の態度はまったく同じだ。この差別を同じく続ける必要があるのか、これは現在の質問だ。

しかし、当時この事件はどの人の考えも変える力を持っていなかった。かえって人々は様々な表現で作家と彼のお父さんを批判していた。教育はそんな簡単に手に

ISSN: 3048-8141 (Online)
DOI: 10.5281/zenodo.18367522
Taiyō
An International, Peer-Reviewed, Refereed, Open Access e-Journal
www.taiyoejournal.com

入れるものではない。。。ダリットでも掃除するのは問題なのか。。。カラスもつるになれるか。。。と言って批判された。

『ジュータン』はワルミキ氏だけの自伝であるだろうか。“私は教育を受けて、就職をして、その惨めな人生から自分を助けたが、まだ多くの人々はその差別や抑圧を運命として受け取っている。

小説の書名を説明すれば、『ジュータン』の意味は食べた後さらに残っている食べ物のことである。家族は非常に貧乏な生活をしていたので上位のカーストの人の『ジュータン』に頼っていた。一緒懸命に働いた後、賃金は『ジュータン』だった。時々年をとった人たちは『ジュータン』の分量についてうれしく話して誇っていた。貧しくてかわいそうな人生だった。

しかし、運はいつも『ジュータン』をもらうまでも良くなかった。その時我慢ができなくて反対の声を出す人もあった。けれども、すべての反対は空腹の前に倒れていた。その時この戦いは上のカーストと下のカーストの間の戦いではなく、自尊心と空腹の戦いだった。そして、この戦いに自尊心はいつも失敗していた。空腹でいつまで戦う事が出来るのか。

子供の時のワルミキ氏は学問したかった。しかし、社会は彼を家族の伝統的な仕事に満足させたかった。学問はこの無慈悲に対する一番強い道具だった。だからこそ子供の作家が教育受けられないようにしていたのは上のカーストの人々だった。

एक रोज़ हेडमास्टर कलीराम ने अपने कमरे में बुलाकर पूछा, “क्या नाम है बे तेरा?”

“ओमप्रकाश!” मैंने डरते-डरते धीमे स्वर में अपना नाम बताया।

हेडमास्टर को देखते ही बच्चे सहम जाते थे। पूरे स्कूल में उनकी दहशत थी।

“चूहड़े का है ?”

“जी”

“ठीक है.....वो जो सामने शीशम का पेड़ खड़ा है उस पर चढ़ जा और टहणियाँ तोड़ के झाड़ू बणा ले । पत्तों वाली झाड़ू बनाना। और पुर स्कूल कू ऐसा चमका दे जैसे सीसा। तेरा तो ये ख़ानदानी काम है। जा फटाफट लग जा काम पे।

(वाल्मीकि,१९६६, पृष्ठ १४-१५)

ISSN: 3048-8141 (Online)
DOI: 10.5281/zenodo.18367522
Taiyō
An International, Peer-Reviewed, Refereed, Open Access e-Journal
www.taiyoejournal.com

私の翻訳

ある日カリラム先生は私を事務所に呼んでこう聞いた“オイ！名前は何だ。。

オム・プラカシュと私は恐怖心で静かに答えた。

校長を見ただけで子供は怖くなっていた。学校中は校長を恐れていた。

チュハレなのか、、、校長は次に尋ねた。

はい！

よろしい。。。それでは前の木に登って、枝を折ってほうきを作れ。多くの葉のほうきを作り、学校中の掃除をして鏡のようにしろ。これは君の家業だぞ。はじめなさい。

このような状態で人生をおくっていた。しかし、やがて作家が教育を受けて結婚した後その人たちの態度は変わってしまった。ある日彼らは作家のお兄さんの家で水も飲まないで作家の家でご飯を食べた。教育はカーストの間の差を短くしていた。しかし、この地位まで着くのにも数え切れないほどの悲しみ、無礼などを経験していた。家族を失って、装飾品を売って、設備の不足の中で勉強を続けていた。はやく、カーストを変わりたかったのだ。

それ以外にヒンズー教と違って様々な習慣や儀式があった。例えば、やもめ結婚は昔から伝統的に行われていた。そして、神様もヒンズー教の神様と違っていた。

それで、儀式や神様が違ったらどういう風にヒンズー教の一番下のカーストのように認められているのか。これは誰か陰謀みたいなものではないだろうか。千年前からヒンズー教の一番下のカーストだといってヒンズー教の人々だけでなくイスラム教の信奉者も抑圧していた。

『破戒』に描かれている穢多

『破戒』は日本の社会問題について書かれている。作家の’島崎藤村’は主人公や色々な事件や登場人物を使ってカースト問題に読者の注目を浴びさせている。皆んなに自分の出身地、家、名字は自己認識で誇りのものであるが、その一方　「穢多」の人にとってこれは様々な困難の原因になってしまう。藤村は穢多ではなかっ

ISSN: 3048-8141 (Online)
DOI: 10.5281/zenodo.18367522
Taiyō
An International, Peer-Reviewed, Refereed, Open Access e-Journal
www.taiyoejournal.com

たが日本社会での穢多に対する差別や抑圧を観察していた。作家は主人公の日常生活で、穢多は社会にどういう風に取り扱われているのか、を描写している。最初、主人公は自分自身が穢多だと言う事を皆に隠している。しかし、ほかの穢多が抑圧されていることを見て心に矛盾を感じていた。話は主人公の子供時代について何も言及されておらず、若い時から描かれている。

主人公の丑松は学校で先生の仕事をして、部屋を借りて独り暮らしをしていた。しかし、周囲の人々が穢多を抑圧しているのを見て、自分自身をいつも振りかえって見ていた。ほかの穢多が差別されるのとは異なり、自分は穢多なのに平気で生活をしているという風に考えていた。彼によると自分のカーストを隠して社会に一般の人々と同じく混合するのは不正直だった。自分は穢多だということを誰にも言わないように父親と約束したので長期間隠して先生の仕事を黙ってしていたが他の穢多が苦痛を受けるのを見て悩んでいた。
その一方、丑松は学問の穢多の漣太郎に影響を受け、自分もそれをまねたかった。漣太郎は丑松が卒業した大学で先生だったが彼は穢多だと言うのが明らかになるとくびにされた。漣太郎が書いた本で丑松はやる気でいっぱいになっていた。 次の文章を解説してみよう。
『先づ猪子漣太郎あたりの思想でしょうよ』
『むむーあの穢多か。』と郡視学は顔をしかめる。（藤村島崎、2005、紙 18）
連太郎が書いた本は彼が穢多だという背景で評価されていた。彼は普通の人間ではなく穢多だったから彼の思想も普通の人間の思想ではなく穢多らしい思想だった。それだけで彼の観念は上のカーストの人々にとって好ましくなかった。観念にもカーストがついていた。さらに、これは校長とともに郡視学の意見だった。校長や先生がそういう風に思えば社会はどうなるのか本当に考える必要がある。この校長はよく教育の設備をなしたので郡視学にメダルももらっていた。そして、読者のため皮肉だが町参議院はそのメダルの重さ、値段と金の清浄を計算した。下記を読んでみると穢多たちの恐れが元わかるようになる。

ISSN: 3048-8141 (Online)
DOI: 10.5281/zenodo.18367522
Taiyō
An International, Peer-Reviewed, Refereed, Open Access e-Journal
www.taiyoejournal.com

『 牧場の土に成りたいというのも、山で葬式してくれと言うのも、小諸の向町へ知らずに置いてくれと言うのも、つまるところは丑松のためを思うからで。』（藤村島崎、2005、紙 37）

私は穢多だという事は生きている間だけの問題ではなかった。死んだ後も問題だった。それで、彼らは人生の終わりも隠したかった。穢多に対して態度や考え方がいつまでも変わらないという事が強調されている。 産まれてから死ぬまで自分のアイデンティティーのことを隠す辛さが感じられる。しかしその利用は次の文章を読んだら賛成する。

『念のため連太郎の著したものだけを開けて見て、消して持ってきた瀬川という認印のところを確かめた。中に一冊、忘れて消してないのがあった。「あーちょっと、筆を貸してくれませんか」こう言って、借りて、赤々と鮮やかに読まれる自分の認印の上へ、右からも左からも墨黒々と引いた。』（藤村島崎、2005、紙 52）

丑松は穢多の状態を改善したかったが現実はそれを許していなかった。不思議な矛盾だった。自分のカーストの実態を改良するより自分を救助することは大切だった。指導者の連太郎先生の本も今は恐れだった。 えたとして認められたら恥のことになるからである。

『あわれみ、恐怖、千々の思いは激しく丑松の胸中を往来した。病院から追われ、下宿から追われ、その残酷な待遇と恥辱とをうけて、黙って逃れていく彼の大尽の運命を考えると、さぞ籠の中の人はなげきの血涙に噎んだであろう。』（藤村島崎、2005、紙 98）

穢多の学生は学校で差別され、穢多の病人は病院から出され、穢多の賃借人は家から追われていた。お金があっても教育があっても人間として認める人はほとんどなかった。愛、尊敬は夢にも考えられないほどの玉物だった。どこでも同じく牧人のように扱われていた。

ISSN: 3048-8141 (Online)
DOI: 10.5281/zenodo.18367522
Taiyō
An International, Peer-Reviewed, Refereed, Open Access e-Journal
www.taiyoejournal.com

『破壊』という小説には部落民の人生の多くの面が明らかにされている。穢多は人間でもなくて動物だった。一般の人々は穢多について話す時、指を四本見せていた。穢多は教育に興味がない者、悪臭を放つ者で体形も普通の人間と違っているように考えられていた。その上、この考え方を皆の前で報告するのも恥ずかしくなかった。穢多より下品なカーストはないと人々は考えて彼らに対して不人情なことをしていた。

しかし、すべての人はそうではなかった。その一方、丑松が愛好する女性は真実が分かっても結婚したいという気持ちを表すし、友達の銀之助もいつものように友情を証明した。学生は丑松のため校長の事務所へ行き、丑松が学校で教えることを続けるようなお願いもする。けれども、校長はずるくそれを否定する。それでも、学生たちは集まって丑松を送りに行くのである。小説の終わりに丑松を好む「おしお」は事実を知っても結婚する気持ちを表す。それは、丑松の大事な勝利だと私は思う。なぜなら、丑松を好む人は事実が分かっても最後まで丑松と一緒にいる。逆に、インドの状況を見てみると、中年の主婦が、子供だった筆者が学校に通っていたというだけで、彼を見下しているのです。下記の文章を見てみろ。

“चूहड़े के जाकत (बच्चे) भी जेवें है मदरसे में।” उसे आश्चर्य हो रहा था।
“कितना भी पढ़ लो....रहोगे तो चूहड़े ही ,” कहकर उसने अपने भीतर की भड़ास निकली और अंदर चली गयी।
(वाल्मीकि,१९६६, पृष्ठ ४३)

私の翻訳

『チュハレの子供も学校へ行くの』彼女はびっくりしていた。

『どんなに勉強してもチュハレ以上にはなれないのよ』と口を尖らして言って彼女は家の中に入ってしまった。

ISSN: 3048-8141 (Online)
DOI: 10.5281/zenodo.18367522
Taiyō
An International, Peer-Reviewed, Refereed, Open Access e-Journal
www.taiyoejournal.com

下位のカーストの子供も学校を通っているということは上位のカーストの女性を驚かせた。突然下位のカーストと上位のカーストの間の距離は消えるように見えた。これは上位のカーストの優越感に傷を与え、精神的に損を与えた。

上記の二つはインドと日本両国の学校でカーストによる差別を良く表している。子供の時から差別は日常生活の一部になっている。国や人種が違っていても差別は同じく行われている。

名字はカースト名を明らかにするので両国で問題の種のようだった。ワルミキ氏の奥さんは自分の名前に彼の名字をつけたくなかった。カーストを隠すために人々は町を出る時、名字を変えていた。名字は人の出身地、家、家族とともに自分自身の認識である。しかし、差別の恐れがあったので穢多やダリットはそれも隠していた。

しばらくすると、『破戒』にも『ジュータン』にも主人公の恋人が現れる。カーストの事実が分かって小説の‘『破戒』に描かれている丑松の恋人は一生一緒に過ごす希望を示す一方、自伝の‘『ジュータン』で作家の恋人は悲しくなって涙を出すがカースト名を親に言わないような願いをして離れてしまう。

両国で低いカーストの人々は大昔から差別や抑圧されているのだった。差別の方法も同じだしその背景の理由も全く同じである。しかし、時間が立つにつれ、教育が普及されてだんだん変わっているようだ。現在の日本で見えないのだがインドの社会に根が深くあるので今まで習慣的にする人は多くいる。

結論

本研究のまとめとして内部と研究目的の関連性について論じる。自伝の「ジュータン」を書いた時作家のオム・プラカシュ・ワルミキは 47 歳だった。その時ワルミキ氏が就職についてから十年間ぐらいだった。自伝は一生を描くもので、人生の終わりごろに書く物だがワルミキ氏は人生の前半だけを語っている。人生の後半はまだである。子供の時から今まで受けた色々な差別や抑圧でいっぱいである人生の前半が描かれているのだが教育を受け、就職についてからの人生について読者は少しし

ISSN: 3048-8141 (Online)
DOI: 10.5281/zenodo.18367522
Taiyō
An International, Peer-Reviewed, Refereed, Open Access e-Journal
www.taiyoejournal.com

か分からない。だから、この小説はその面から見ると不十分だと思う。 さらに、下位のカーストの人は自尊心がいなかったと述べているのが作家の父親と母親の性格を見ると自尊心の強い人のように見える。両親の自尊心で作家も子供の時から今までの旅行にナビをできたそうである。子供の時みんなにいじめられ、勇気を出して直面しないということは作家の性格だと言える。その一方、破壊に登場する主人公の連太郎も自分の正体を隠しているのだがそれはお父さんにした約束のためである。日本人の丑松もインド人のワルミキも自分の正体を隠したくなかっただ。両方も本気で自分のカーストは低いと思っていなかったからだ。

法律的にカースト制度は禁止されても、村人に差別されていたが社会は一斉に変える物ではないとということを認識して人生を送ろうとしたらサポートする友達も見つけた。教育を持って、仕事する人は同じ村人の家族に尊敬されていた。
また、『ジュータン』は自伝だが本当に文学作品と言えるのだろうか。『ジュータン』は文学的な味があまりなく、事件ごとに不満をいだいている。そして、作家もその差別をチャレンジとして受けていない。何事にもチャレンジ精神が大切だと私は思う。しかし、子供の時、作家の自尊心がいつも傷を受けたので作家は精神的にそうなったとも言える。
現在のインド社会を見ると政治は下位のカーストを昇格するのに様々な政策を取っている。その中で最も重要なのは保留制度である。現在保留制度は色々な質問を出して話題になっている。例えば、この制度はどれほど下位のカーストの地位を昇格しているのか。この制度によってダリットはもっと差別されていないのか。実際に、独立の 66 年の後もどうしてこんな習慣はまだ残っているのか。下位のカーストの人は自尊心がいなかったと述べているのが彼の父親と母親の性格を見ると自尊心の強い人のように見える。両親の自尊心で作家も子供の時から今までの旅行にナビをできたそうである。
両国で「ダリット」や「穢多」について様々な傾向、伝統と習慣が昔から続いているということを学習した。この差別は伝統的な形で一世代から二世代に連続的に続いていった。彼らのため自尊心、愛、人情、平等などは言葉しかない。カーストが

ISSN: 3048-8141 (Online)
DOI: 10.5281/zenodo.18367522
Taiyō
An International, Peer-Reviewed, Refereed, Open Access e-Journal
www.taiyoejournal.com

知らない人は一緒に遊んだり、食べたりしていたが、カーストが知った後、無慈悲な態度でふるまっていた。だからこそ両国では「ダリット」や「穢多」は自分のカーストを出来るだけ隠していた。その差別の背景に穢れの概念があるに違いない。カーストは生まれつきのものだから返すことはできない。インドのダリットも日本の部落民もそれを変えることができないが秘密にもしたくない。明確したら人々に差別されることが嫌がって精神的に困っていた。

学校の環境を比較すれば差別は両国にあるのだが水までも禁止されているインドのほうはもっとひどく見える。その一方、日本の学校で一人の先生が穢多の先生を平等に扱っていなかった。村か町かどこでも同じ状態だった。しかし、生徒たちは彼のカーストを気にすることなく、彼に尊敬と愛情を示した。

明治維新後、身分制度は解放され、1920 年に設立された全国水平社、また 1946 年の部落解放全国委員会は平等の社会を作るのに重要な役割を果たした。日本ではカーストの昇格のため保留制度のような政策がないのでこの分野で両国はまったく違っている。現在日本でこのような差別は見えないようになった。だからこそ、抑圧や差別を取り消すのは政治より国民次第だとも言える。

また、アジア諸国の社会問題を比較すると、人間に関する共通認識、すなわち重要性の階層構造が見られるように思われる。自伝の「ジュータン」に自己の体験をありのまま表現しているが小説の「破壊」に作家の想像が描写されている。「小説」と「自伝」の差は所々出てくるのだが「部落民」や「ダリット」に対しての抑圧、差別が似合っているに違いない。その上、その背景にも汚れ、死に対する思考も同じく取り扱われている。

参考文献

藤村,島崎 、破戒、 新湖社版、日本、1954

Valmiki, Omprakash, Joothan -I, Radha Krishna Prakasan Pvt Ltd; 12th edition (January 1, 2017)

Valmiki, Omprakash, and Arun Prabha Mukherjee. *Joothan: An Untouchable's Life*. Columbia University Press, 2008.

Vyas, Aparna. "A Cultural Psychological Reading of Dalit Literature: A Case Study of *Joothan* by Om Prakash Valmiki." *CASTE: A Global Journal on Social Exclusion*, vol. 1, no. 2, 2020, pp. 157–68.

Toson, Shimazaki, The Broken Commandment (Trans. Strong, Kenneth), University of Tokyo Press, 1987

Samel, Swapna. "BURAKUMIN — A JAPANESE MARGINAL GROUP: JAPAN'S HIDDEN PEOPLE FIGHT TO GAIN EQUALITY." *Proceedings of the Indian History Congress*, vol. 70, 2009, pp. 785–94.

DE VOS, GEORGE, and HIROSHI WAGATSUMA. *Japan's Invisible Race: Caste in Culture and Personality*. 1st ed., University of California Press, 1966.

Keiji, Nagahara. "The Medieval Origins of the Eta-Hinin." *Journal of Japanese Studies*, vol. 5, no. 2, 1979, pp. 385–403

John, Jose Kalapura. "DALIT STRUGGLE FOR EQUALITY: A STUDY OF THREE MOVEMENTS IN THE 1930S." *Proceedings of the Indian History Congress*, vol. 62, 2001, pp. 668–84.

Donoghue, John D. "An Eta Community in Japan: The Social Persistence of Outcaste Groups." *American Anthropologist*, vol. 59, no. 6, 1957, pp. 1000–17.

Smythe, Hugh H. "The Eta: A Marginal Japanese Caste." *American Journal of Sociology*, vol. 58, no. 2, 1952, pp. 194–96.